

京都大学における橋渡し研究（シーズA）発掘への取り組み

○柏崎 安男¹⁾、関 二郎¹⁾、大菊 鋼¹⁾、服部 華代²⁾、中村 明生²⁾、高谷 宗男²⁾

¹⁾ 京都大学 学術研究支援室、²⁾ 京都大学医学部附属病院 臨床研究総合センター

背景

AMED第2期橋渡し研究・加速ネットワークプログラムにおいて、京都大学における平成26～28年度（3年間）のシーズA応募状況には大きく分けて以下の問題点があった。

- ① 拠点内の応募数が少ない（H26:9件, H27:24件, H28:23件）
- ② 医学部以外からの応募が少ない（H26:0件, H27:0件, H28:1件）
- ③ 同一研究者からの応募が増加
- ④ 拠点外からの応募が少ない（H26:6件, H27:5件, H28:2件）

平成29年度の第3期橋渡し研究・戦略的推進プログラムを開始するにあたり、これらの問題解決を目的に種々の取り組みを行った。

これまでのシーズ発掘への取り組み

- ◆研究者への個別アプローチ
臨床研究に繋がる他学部の研究シーズをリサーチし、個別訪問を実施。
- ◆学術研究支援室への協力依頼
シーズA募集の配信を依頼。

【結果】

- ・個別アプローチにより研究者との関係を築くことができたものの応募には至らず、効率性、公平性の面での課題が残った。
- ・学術研究支援室への協力依頼が公募直前であったので、応募数の増加に繋がらなかった。

平成29年度シーズ発掘の改善点

- ◆臨床薬学懇話会の設置（他学部と病院）
薬学部のシーズ発掘と、医学部と薬学部の研究者の交流を目的に、臨床薬学懇話会を新設（4回/年）し、橋渡し事業について情報を発信。
- ◆学術研究支援室への協力依頼（研究者への情報発信）
公募開始の半年前から学術研究支援全体との協力体制を築き、応募要領の見直し等を共同で行った。

【結果】

- ・学術研究支援室のネットワークを活用した効率的な学内配信が可能となり、拠点内応募数が大幅に増加（24件 ⇒ 40件）。
- ・医学部以外からの応募も13件にのぼった。

- ◆開花ネットワーク（京大と西日本の医学部とのネットワーク）へのアナウンス
情報交換会やメーリングリストを利用しての情報を配信した。

【結果】

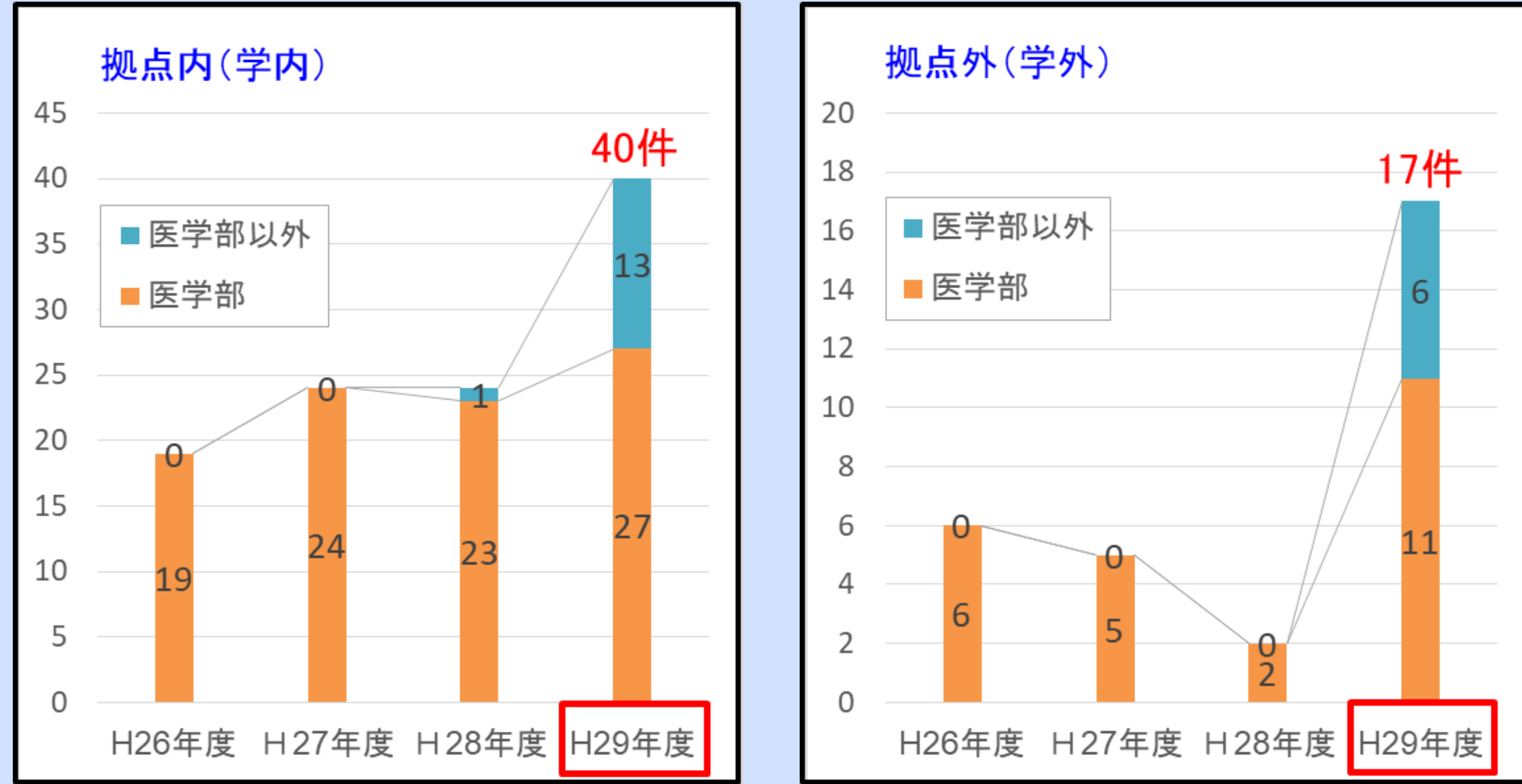
- ・年1回秋主催の会では、参加者へ十分に情報を伝えることができなかった。臨床研究支援センターへの情報発信だけでは基礎研究者にまで十分な情報が届かず、結果として応募数は伸び悩み、同じ研究者からの応募が目立った。

- ◆各大学で説明会を実施
開花ネットワーク以外の大学（医学部を持たない私立大学を含む）へもアプローチを実施した。

【結果】

- ・拠点外からの応募が大幅に増加した（2件 ⇒ 17件）。
- ・一次審査において、探索医療の可能性などの観点から評価した得点が昨年より上昇した。

シーズ数の増加



シーズの質向上への試み

	平成28年度	平成29年度
選定上の問題点と改善点	審査に臨床の視点は反映されているが、特許性が反映されていなかった	知財評価シートを用いて一次審査を実施した
	審査員が医学部の教授のみ。	薬学部の教授（4名）を審査員に起用した
	平成28年度・採点結果	平成29年度・採点結果
平均得点	9.5	9.9
最高得点	11.1	13.4
最低得点	7.2	7.6

※ 15点満点
独創性、探索医療への貢献、研究計画の妥当性（各5点）

シーズ発掘にかかる今後の課題

- | | | |
|-------------------------|---|---------------------------------------|
| ① 応募数が増加した場合に備えた審査方法の構築 | → | 審査体制の見直しと重点分野の設定の検討 |
| ② 拠点外への説明会の計画的かつ戦略的な実施 | → | 発掘候補大学のリストアップと実施計画の立案 |
| ③ 更なる応募数の増加と質の向上 | → | 研究者からの相談受付体制の整備と、審査委員の構成の見直し（目利き力の強化） |
| ④ 医療機器シーズの発掘 | → | 学内（理・工学部）連携の一層の強化 |